＜考察＞瀬織津姫

天照大神の荒魂（アラミタマ）とは、

別名：向津姫（ムカツヒメ）・・・・・伊弉諾・伊弉冉の娘：素戔嗚と宇佐で誓約を結ぶ。（日本書紀）
素戔嗚の妻　（巫女）　（神功皇后紀：「撞賢木厳之御魂（天疎向津媛命）」）

別名：瀬織津姫（セオリツヒメ）・・天照国照御魂尊（饒速日）の妃のこと：熊野那智大社の龍神。
饒速日の妻　（巫女）　天日神／大己貴尊の娘（天道日女命）　（先代旧事紀／勘注系図）

（伊勢内宮の別祭宮）・・・※持統天皇（藤原氏）によって、瀬織津姫は神社のご祭神を封印された。記・紀には瀬織津姫の記載がない。

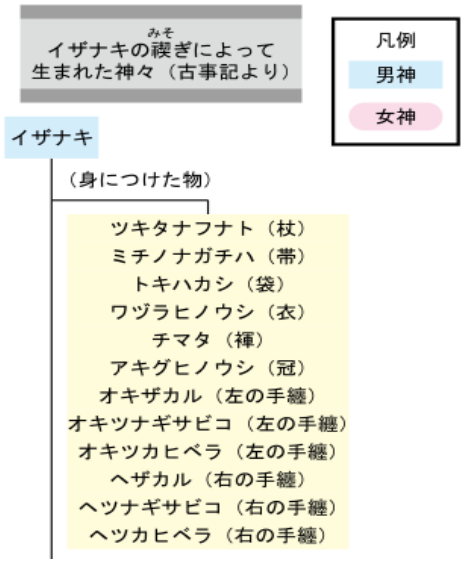
……

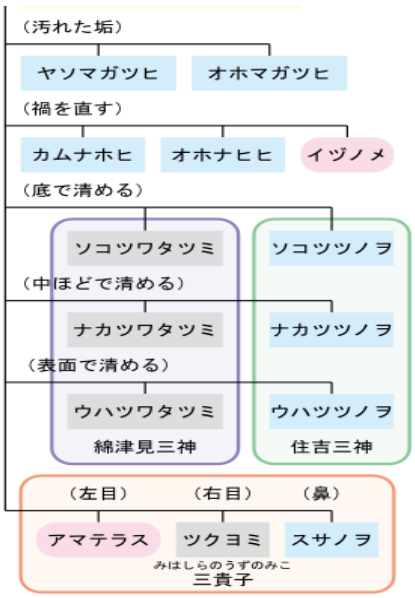
異説：禍津日神（マガツヒ）　・・・伊弉諾が、黄泉の国から帰って、禊（みそぎ）をした時に誕生。
（古事記）

＜古事記＞

【瀬織津姫神】（≒木花知流姫命）　＜参照＞古代史俯瞰 https://tokyox.sakura.ne.jp/wordpress/

瀬織津姫神は、皇祖・伊奘諾尊が日向の小戸の橘の檍（あわぎ）原に祓除（みそぎはらい）し給ふ時、左の眼を洗った時に生れた。故に「日の天子」の資格を継承した事となり、「大日霎貴」（おおひるめのむち）とも讃えられた。





【禍津日神】

神産みで、黄泉から帰った伊邪那岐命が禊を行って黄泉の穢れを祓ったときに生まれた神で、
『古事記』では八十禍津日神（やそまがつひのかみ）と大禍津日神（おほまがつひのかみ）の二柱、
『日本書紀』第五段第六の一書では八十枉津日神（やそまがつひのかみ）と枉津日神（まがつひのかみ）としている。
これらの神は黄泉の穢れから生まれた神で、災厄を司る神とされている。神話では、禍津日神が生まれた後、その禍を直すために直毘神（なおびのかみ、神直毘神、大直毘神）二柱と伊豆能売が生まれている。
なお、『日本書紀』同段第十の一書ではイザナギが大綾津日神を吹き出したとしている。これが穢れから生まれたとの記述はないが、大綾は大禍と同じ意味であり、大禍津日神と同一神格と考えられている。
（注）賀志波姫（津峯神社のご祭神）との関係は、不明？（＝出雲の日女神）

■天照大神の荒魂：（向津姫≒瀬織津姫）

＜参照＞人文見聞録　https://cultural-experience.blogspot.com/2017/02/blog-post.html

瀬織津姫は、大祓詞に登場する神で、別名に、**天照大神の荒魂（アラミタマ）**、**向津姫（ムカツヒメ）**、**禍津日神（マガツヒノカミ）**などがある。古事記・日本書紀には記されていない。民間伝承においても様々な言い伝えがある。

向津姫（ムカツヒメ）

・撞賢木厳之魂天疎向津比売

・『日本書紀』の**神功皇后紀**に登場する**「撞賢木厳之御魂天疎向津媛命」**に基づき、天照大神の別名と考えられている

→ 廣田神社では「天照大神の荒御魂」として祀られている

・『ホツマツタエ』においては、セオリツヒメの別名（アマサカルヒニムカツヒメ）とされる

・『竹内文書』には、女神・天照皇大神の別名に天疎日向津姫尊（あまさかるひにむかつひめのみこと）とある

瀬織津姫（セオリツヒメ）

「記紀神話※」には登場せず、神道においては大祓詞（神道の祭祀に用いられる祝詞の一つ）にて多少 説明されている程度であるため、神としての性格は謎に包まれています。

一方、学術的には偽書とされている『ホツマツタエ※』には多く登場し、出自から系譜や経歴に至るまで詳細に記されています。なお、当文献におけるセオリツヒメはアマテル（男神の天照大御神）の皇后であり、オシホミミ（天忍穂耳尊）の母であるとされています。

【神道】

・**『大祓詞』に登場**し、〝祓い清められた全ての罪を大海原に持ち去る〟とされる

→ 「～早川の瀬に坐す。**瀬織津比売**と伝ふ神。大海原に持出でなむ。」とある（参考：大祓詞）

・**祓戸四神の一柱**で、〝人の穢れを早川の瀬で浄める祓い浄めの女神〟として祀られる

→ 基本的に全国の祓戸神社で祭神（祓戸大神、祓戸四神の一柱）として祀られている

・**水神として祀られる**ケースもある

→ 水神、瀧神、川神の性質を持ち、九州以南では海の神ともされる

→ 日本の神としては、霾神・閻罔象神などの水神や、市杵嶋姫命（宗像三女神の一柱）と同様の性格を持つ

⇒ 外来神では、吉祥天や辯才天（弁財天）と同様の性格を持つ

・**天照大神の荒魂である**とする説がある

→ 神道書の『倭姫命世記』においては、伊勢内宮の別宮 荒祭宮の祭神の別名が瀬織津姫であると記述される

⇒ 『天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』『伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記』『中臣祓訓解』にも記述がある

・**禍津日神（まがつひのかみ）と同神**と解釈されることもある

→ 神道書の『倭姫命世記』ほか において、荒祭宮の祭神の別名に八十禍津日神の神名があるため

→ 大禍津日神、大綾津日神などの神名で祀る神社がある

【概要】

瀬織津姫は、神道の大祓詞に登場する神である。

瀬織津比咩・瀬織津比売・瀬織津媛とも表記される。古事記・日本書紀には記されていない神名である。

水神や祓神、瀧神、川神である。九州以南では海の神ともされる。祓戸四神の一柱で祓い浄めの女神。

人の穢れを早川の瀬で浄めるとあり、これは治水神としての特性である。

『倭姫命世記』『天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』『伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記』『中臣祓訓解』においては、伊勢神宮内宮別宮荒祭宮の祭神の別名が「瀬織津姫」であると記述される。なお、荒祭宮は、かつては正宮に位置していたと推定される。伊勢神宮公式の由緒書きに、「その御魂をこのように二宮に並べてお祭りするのは、皇大神宮に天照大神を、同別宮に天照大神の荒御魂を奉祀する姿の古い形と言われています。」と記されている。
このとおりであれば、正宮は、式年遷宮のたびに位置を替えるのではなく、
常に東に位置する正宮は**天照大神**、西に位置する正宮は**瀬織津姫**を祀っていたこととなる。
『ホツマツタエ』では、日本書紀神功皇后の段に登場する撞賢木厳之御魂天疎向津媛命と同名の向津姫を瀬織津姫と同一神とし、天照大神の皇后とし、ある時は天照大神の名代として活躍されたことが記されている。瀬織津姫は穂乃子という名でも登場する。瀬織津姫穂乃子という。この瀬織津姫は本当の瀬織津姫かは、ホツマツタエが偽書であるかないかとともに、真偽が問われる部分である。
また六甲比命講は、瀬織津姫を祭神としている神社の総本宮は兵庫県神戸市に鎮座する六甲比命神社（兵庫県神戸市）と考えられるとし、六甲比命大善神の磐座の存在が六甲の山名の由来であると推定し、またこれらは『ホツマツタエ』の記述から導き出されたものであるとする。

饒速日命（にぎはやひのみこと）との関連もある。
また、瀬織津姫は天照大神と関係があり、天照大神の荒御魂（**撞賢木厳之御魂天疎向津媛命(つきさかきいつのみたまあまさかるむかつひめ)**）とされる。「西宮」の地名由来の大社である廣田神社（兵庫県西宮市）は、天照大神荒御魂を主祭神としているが、戦前の由緒書きには、瀬織津姫を主祭神とすることが明確に記されていた。
御神体の神鏡は、元は宮中の賢所に祀られていたのだが、武内宿禰・神功皇后の御代に廣田神社へ遷したことが、廣田神社由緒書きに記されている。この時期に神社祭祀に大きな変更が加えられた可能性がある。天照大神との関わりは、謎が多い。
熊野神社を遡り調べると熊野権現は瀬織津姫なりという説がある。大和政権がエミシ征伐の際、熊野権現を守り神とし北へ向かった。制圧した後、気仙沼市唐桑町に瀬織津姫神社、熊野神社などが鎮座した。

＜参照＞いにしえの都　https://spiritualjapan.net/11634/
瀬織津姫命の正体：瀬織津姫命は記紀に登場しないので、その素性がはっきりしない。
大祓詞に登場する重要な神が「瀬織津姫命」である。
天照大神荒魂説
天照大神の荒魂が瀬織津姫命であるとする説は、次の文献に見ることができる。
神道五部書と呼ばれる、外宮の神職「渡会氏」によって提唱された「伊勢神道」の経典とも言える５つの書物の中に、下記のような記述が見える。

- **倭姫命世記**･････････････････････････**「皇太神宮荒魂　一名　瀬織津比咩神」**
- **天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記**･･･**「天照荒魂　亦の名　瀬織津比咩神」**
- **伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記**･････････**「天照荒魂　亦の名　瀬織津比咩神」**

また、真言密教から見た大祓詞の解説書では、

- **中臣祓訓解**･････････････････････････**「瀬織津姫命　八十柱日神であり天照太神荒魂」**

皇大神宮の別宮「伊雑宮」の御師である西岡家伝承の文書には、

- **「玉柱屋姫神　天照大神分身在郷」、「瀬織津姫神　天照大神分身在河」**

中世末期から江戸末期まで、伊雑宮の祭神は**「伊佐波登美命」「玉柱屋姫神（玉柱神）」**の２座と考えられており、玉柱屋姫神は里に座す天照大神の分身で、瀬織津姫は河に座す天照大神の分身と解説する。
すなわち、**天照大神・玉柱屋姫神・瀬織津姫神は同じ神である**というに等しい。

また、天照大神荒魂を祀る「廣田神社」の戦前までの由緒書に、

「祭神の天照大神荒魂（撞賢木厳之御魂天疎向津媛命）：（つきさかきいつのみたまあまさかるむかいつひめのみこと）は瀬織津姫である」

と、ズバリ明記されていたらしい。

概ね、天照大御神（女神）の荒魂。

その亦の名を**瀬織津姫命（女神）**といい、ときには**玉柱屋姫命（女神）**という。

しかし、次の説は尋常ではない。

天照大神の妃（正室）説

瀬織津姫は天照大神の妃であったとする説である。

何が尋常ではないのかというと、言うまでもないが、**天照大神が男神**であったことの証となるからだ。

ホツマツタエによると、

- **伊邪那岐と伊邪那美には４人の子がおり、**
- **長女がワカヒメ、長男がアマテラス、次男がツクヨミ、三男がスサノオで、**
- **長男のアマテラスの妃の一人が瀬織津姫である。**

としている。そして、

- **後にアマテラスが瀬織津姫を正妻として「内宮」に迎え入れたので、**
- **瀬織津姫は「向津姫」となる。**　　とも。

ホツマツタヱ

神代文字の一種「ヲシテ文字」で書かれた古史古伝の一つ。天地開闢から景行天皇までを五七調の長歌体で綴る叙事詩である。

神田の古本屋で写本が再発見されたのが昭和４１年。そして、その存在は江戸中期までしか遡ることができない。

というわけで、偽書であるとの評価であるが、一方、記紀の原典となった真書であるとする研究者も増えてきている。

偽書であるとされているが、これが本当に真書であったならば、を考えると、**偽書にしておかなければならない。**

天照大神は女神ではなく男神だった、ということの証となるからだ。そして記紀がそれを隠したという事実が明るみに出る。しかも、

瀬織津姫を史実から抹殺するだけでなく、男の天照大神まで封印してしまったことになろう。

何故、そうまでして、天照大御神が女神でなければならなかったのだろう。

それは、時の天皇である「持統天皇（女帝）」の正当性を担保するためであるという見方が一般的なようだ。

さらに、瀬織津姫と同時に封印された「男神の天照大神」がすなわち「饒速日尊」なのだと歴史家はいう。

となれば、神武天皇の正当性まで疑われてしまうわけだ。

その他の説：ほかにも、

- **瀬織津姫命が３分割されて宗像三神となった。**
- **瀬織津姫命は菊理媛神、水波能売命、市杵島姫命、弁財天、である。**
- **大山祇神が瀬織津姫命で、その娘である木花咲耶姫命と磐長姫命は瀬織津姫の２面性を表す。**

これらの説は、饒速日尊を祀る神社が祭神の変更を余儀なくされたように、瀬織津姫命を祀る神社が、上記の祭神名に変更させられたという側面もあろう。

大祓詞（おおはらへことば）

大祓詞は長文であるため、瀬織津姫命を始めとする祓戸四神が登場する場面だけを抜粋すると、以下の通りである。

高山の末　短山の末より　佐久那太理に落ち多岐つ　速川の瀬に坐す　瀬織津比売と云ふ神

たかやまのすゑ　ひきやまのすゑより　さくなだりにおちたぎつ　はやかはのせにます　せおりつひめといふかみ

大海原に持ち出でなむ　此く持ち出で往なば　荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す

おほうなばらにもちいでなむ　かくもちいでいなば　あらしほのしほのやほぢのやしほぢの　しほのやほあひにます

速開都比売と云ふ神　持ち加加呑みてむ　此く加加呑みてば　氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神

はやあきつひめといふかみ　もちかかのみてむ　かくかかのみてば　いぶきどにますいぶきどぬしといふかみ

根國底國に氣吹き放ちてむ　此く氣吹き放ちてば　根國底國に坐す速佐須良比売と云ふ神　持ち佐須良ひ失ひてむ

ねのくにそこのくににいぶきはなちてむ　かくいぶきはなちてば　ねのくにそこのくににますはやさすらひめといふかみ　もちさすらひうしなひてむ

意味はというと、

（祓い清められた全ての罪は）高い山・低い山の頂上から、勢いよく流れ落ちてきて**渓流の瀬にいらっしゃる「瀬織津姫神」が大海原に流してくれるだろう。**　このように流された罪は、荒海の多くの流れが合わさって渦巻くあたりにいらっしゃる**速開都比売神**が、ガブガブと呑んでくれるだろう。

このようにガブガブ呑まれた罪は気吹戸にいらっしゃる**気吹戸主神**が、根の国・底の国に吹き払ってくれるだろう。

このように吹き払われた罪は、根の国・底の国にいらっしゃる**速佐須良比売神**がどこか知らないところに持ち去って、失くしてくれるだろう。

「ホツマツタヱ」　祝詞以外では、前述のとおり「ホツマツタヱ」に登場する。具体的には、

天の巻（六）アマテルの 12 妃の制定

サクラウチガメサクナタリ　セオリツホノコサノスケニ

サクラウチの娘**サクナタリ·セオリツ·ホノコ**は南のスケ后となり、セオリツヒメは、はじめはアマテルの１２人の妃の一人で、南のスケという地位であった。サクナタリ·セオリツ·ホノコとは、**「滝から崩れ落ちるように、背が階段を落ち下った、ホノコ」**という意味で、**瀬織津姫の本名は「ホノコ」**ということになろうか。

天の巻（六）セオリツヒメの内宮昇格

ソノナカヒトリ　スナオナル　セオリツヒメノミヤビニハ　キミモキサハシフミオリテ　アマサガルヒニ

ムカツヒメ　ツヒニイレマスウチミヤニ　カナヤマヒコガウリフヒメ　ナカコオスケニソナヱシム　・・・

その中の一人素直な　**セオリツヒメ**の気高くも優美な様には、君も階段を踏み下りて　**アマサカルヒニムカツヒメ**（と名付け）　遂には迎え入れられた内宮に。　**カナヤマヒコ**の娘の**ウリフ姫　ナカコ**が空いた南のスケ后が代わりに据えられた大君が自ら玉座から降りて妃を迎えるという行為は、あり得ないと思われる。

それほどまでに、アマテルがセオリツに心を奪われた様を表している。そして、内宮に入る瀬織津姫は**「あまさかるひに　むかつひめ」**という称名（たたえな）を得たわけだ。

この意味はというと、**「降りてきた日神（君）に向かった姫」**。さて、代わりに南のスケに据えられた「ウリフ姫ナカコ」の「ウリフ」は、**閏年の「閏：うるう」**。臨時を表す「閏」の語源であろう。

ナリテイサワニミヤウツシ　ココニイマセバムカツヒメ　フヂオカアナノオシホヰニ　ウブヤノミミ

ニアレマセル　オシホミノミコオシヒトト　イミナオフレテカミアリノ　モチヰタマエバタミウタフ　・・

そこでイワサに都を移し　ここに居住していたらムカツヒメが　フジオカアナのオシホイの　産屋で生んだオシホミの皇子のオシヒトと　いみなを宣して餅飯を配ると民が唄った　・・・

ムカツヒメ（瀬織津姫）が、藤岡穴の**忍穂井の縁**（耳）に産屋を建てて、皇子：**忍穂耳**を生み、**ホシヒトを真名（いみな）**として振れまわった。イサワの都とは現在の**「伊雑宮」**とされ、忍穂井とは**「神宮外宮の上御井神社」**の場所を指すとされる。

■天道日女命≒瀬織津姫　＜参照＞https://makild.exblog.jp/14562713/

国津比古命神社と櫛玉比賣命神社。二つの神社は、伊予北条（松山市）の櫛玉比賣命古墳に鎮座します。

国津比古命神社の御祭神は、天照国照日子天火明櫛饒速日尊。

櫛玉比賣命神社の御祭神は、妃の天道日女命（海部氏）。御炊屋姫命（物部氏）。

国津比古命神社は、応神天皇の時代に物部阿佐利が國造に任命され、彼の祖神である櫛玉饒速日尊と宇摩志麻治命（櫛玉饒速日尊の子）をお祭りしたことに始まります。初め『櫛玉饒速日命神社』でしたが、物部阿佐利命を合祀して國津比古命神社と名を改めました。

櫛玉比賣命神社は、同じ頃、櫛玉饒速日尊の妃神をお祭りしたのが始まりです。

またの名前、**社号は『祓座大明神(はらいにますだいみょうじん)』**ともいわれました。それは、饒速日尊の宮殿を参詣する前に、ここでまずお祓いを行ったと伝わっています。**『祓座大明神(はらいにますだいみょうじん)』**この名前を見るだけでも、まるで**瀬織津姫**。饒速日は、物部氏の子孫である、小千氏の祖神。そして、もちろん、妃神も祖神です。

越智、河野家は、三島明神を、祖神として古代から、現在まで、変わらず信仰し続けています。

大三島の大山祇神社を祖神として、三島明神を祀ったにも関わらず、**祭神は、大山積神。**

でも、この祭神は、**三島明神＝瀬織津姫・饒速日尊**　ということが、ほぼ間違いのないことと思っています。

すると、ここ北条では、饒速日とともに、妃神は、天道日女命ではなく、瀬織津姫ということになります。

「祓座大明神」だけでも、十分姫の姿を見ることができますが、この二つの神社には、今はほとんど他では行われていない、特別な神事があります。秋に行われる、お祭りの中に、御動座祭というお祭りがあります。

他のお祭りは、男神、饒速日のお宮から始まるのですが、どういうわけか、この御動座祭だけは、姫神である、櫛玉比賣命神社から始まるのです。

この動座祭は、『日本書紀』に書かれる神武天皇の「顕斎」の構造とよく似ているといわれます。

「顕斎」というのは、目に見えない神を見えるようにして祀ること。つまり**斎主（神主）として厳姫と言う巫女名（司祭者として神意を伝えるシャーマン）を授け、神武天皇自身が高皇産霊尊になる儀式を行って、高皇産霊尊を身に憑（のりうつ）らせ、神託を聞かせた**と伝わる記述です。

御動座祭の中の特別な神事「『宵の明星』が、この記述とよく似ています。

これは、宮出し前のお忍びの神輿渡御のことで、神主である國津比古命神社宮司、年に一度の大祭に合わせて風早のクニタマ（國魂＝古代風早国草創から続く首長霊）をその肉体に乗り移らせてその霊威を更新させ向こう一年、善政を行うことを祖神に誓う神事なのです。

神主が御祭神である饒速日尊（ニギハヤヒ）の降臨・御動座を希（こいねが）う祝詞奏上しているところへ、櫛玉比賣命神社の神輿一体が無言のまま石段を降りてきて八脚門の前に差し掛かる。

この時、その姫神の神霊が、風早國造神主に憑依し（表面上女性化する）、つまり目に見える現実の神事は男性の宮司によって斎行されていますが、宗教儀式上は、妃である櫛玉比賣神が、饒速日尊の神輿へのお渡りを誘導する神聖な儀式。古代においては、実際の政治は王である男が行っていましたが、さまざまなことを決める役を果たすのは、妃である女性祭祀者でなくてはならなかったのです。

「厳姫と言う巫女名」　これは、瀬織津姫とも言われる、宮島の厳島神社の厳島姫（イチキシマヒメ）のことかとも思うのです。厳島姫とは、瀬織津姫が、巫女（シャーマン）的な役割も果たしていたということにも繋がるような気がします。物部氏の祖神饒速日尊と、「祓座大明神」瀬織津姫は、天道日女命と名前を変えても、今もなお、ここ北条では、古くから伝わる神事を行っていたのです。古くは、国津比古命神社に参拝する前には、必ず、姫神が鎮座する、櫛玉比賣命神社に参拝し、祓いを行ってから参拝していたとも言われています。

＜参照＞名古屋神社ガイド https://jinja.nagoya/kamisama_jiten/amenomitihime

アメノミチヒメ《天道日女命》	
『古事記』表記	なし
『日本書紀』表記	なし
別名	屋乎止女命（ヤオトメ）、高照光姫、高光日女、祖母命
祭神名	天道日女命・他
系譜	（父）天日神（『先代旧事本紀』）、または大己貴神（尾張氏系図） （夫）天火明 （子）天香具山
属性：後裔	尾張氏母系の祖：尾張氏、海部氏
祀られている神社	青衾神社（名古屋市熱田区）

尾張氏の祖・天火明（アメノホアカリ）の妃となり、尾張氏 2 代・天香具山を生んだとされる。
つまり、尾張氏の母系の祖ということになる。
尾張氏系図では大己貴神（オオナムチ）の娘としているのに対して、『先代旧事本紀』では対馬縣主の祖・天日神命（アメノヒノカミ）の娘とする。

人物関係がややこしいのだけど、『先代旧事本紀』は天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊として天火明と饒速日（ニギハヤヒ）を同一としているので、天道日女との間に天香語山（天香久山）が生まれ、『日本書紀』を信じるなら三炊屋媛（ミカシキヤヒメ/『古事記』では登美夜毘売（トミヤビメ））との間に可美真手命（ウマシマデ/古事記では宇摩志麻遲命）が生まれたということになる。
三炊屋媛/登美夜毘売は記紀では神武東征に抵抗した大和の豪族、長髄彦（ナガスネヒコ/那賀須泥毘古）の妹としている。
尾張氏系図では、天火明と佐手依姫（サデヨリヒメ）との間に穂屋姫（ホヤヒメ）がおり、天香語山命とは異母兄妹となるのだけど、このふたりは婚姻したことになっている。このふたりの間の子が尾張氏 3 代の天村雲（アメノムラクモ）だ。
穂屋姫は素戔嗚尊（スサノオ）の娘で、宗像三女神のうちのひとり市杵嶋姫（イチキシマヒメ）や瀬織津姫（セオリツヒメ）と同一という話がありますます混乱する。
『先代旧事本紀』がいう天道日女の父の天日神というのがよく分からないのだけど、別名を天照魂命（アマノテルミタマ）という。尾張氏系図がいう父・大己貴とつながるのかどうか。

天道日女はまたの名を、屋乎止女命（ヤオトメ）、高照光姫、高光日女、祖母命ともいう。
ヤオトメというと羽衣伝説の八乙女を連想させる。
『丹後国風土記』逸文に、京都舞鶴にある山口神社の由緒に関する話がある。
天香語山命が倉部山（三国山）に神庫を作って神宝を収蔵し、長い梯子（はしご）を設けたのでそ

こを高橋郷と呼ぶようになったといい、現在は峰に天香語山命を祀る天藏神社がある。
　その麓には山口坐御衣知祖母祠が置かれ、これは天道日女が年老いてこの地にやって来て、麻を績いだり、蚕を養ったりして人々に教えたので後に祀られたといった内容だ。
　8 人の天女が眞名井で水浴びをしているとき、老夫婦がひとりの天女の羽衣を盗んだので天に帰れなくなり、仕方なく天女は老夫婦の家で酒を作って富ませたところ追い出されてしまい、奈具村に辿り着いて祀られるようになったという話が、同じく『丹後国風土記』逸文の奈具社の由緒として書かれている。
　この眞名井を祀るように命じられたのが天香語山で、母親の天道日女がヤオトメ＝屋乎止女＝八乙女であるなら、そこには何かつながりがあると考えるのが自然だ。
　現在、眞名井があったとされる場所に京都丹後一宮・籠神社の奥宮・眞名井神社があり、豊受大神（トヨウケ）を祀っている。そのため籠神社は元伊勢を名乗っている。
　天道日女はトヨウケ神かもしれないし、トヨウケの巫女とも考えられる。
　籠神社の宮司家は尾張氏一族で海部氏系図が知られる海部氏だ。
　天道日女の子の天香山には天香山姫がいたという話があり、カグヤマ姫はカグヤ姫のことかもしれない。
　丹波（たんば）の地名は、天火明が開拓した田庭から来ているという話もある。
　名古屋では熱田区の青衾神社が唯一、天道日女を祀っている。
　青衾神社は熱田神宮の境外摂社で、今はこぢんまりした神社なのだけど、『延喜式』神名帳では名神大社だった。
　創建については不明で、祭神についても諸説ある。「あおぶすま」の「ぶすま」は、産土（うぶすな）から来ているとして、津田正生は天香語山命が祭神だと考えた。
　衾（ふすま）というのは後年、掛け布団のようなものをそう呼んだのだけど『日本書紀』に真床追衾（まとこおうふすま/真床覆衾とも）として何ヶ所か出てくる。
　瓊瓊杵（ニニギ）が天孫降臨する祭、高皇産霊（タカミムスビ）がニニギを真床追衾で覆ったとし、山幸彦（ホホデミ）が海宮に行ったとき座したのも、豊玉姫（トヨタマヒメ）が生んだホホデミの子を包んだのも真床覆衾だった。
　現代でも、大嘗祭の際に天皇が臥す衾がこれを表しているとされる。
　そこからするとただの寝具や赤ん坊を包むものというわけではなく、天津神の象徴といった意味があると思われる。
　青衾神社がこの衾に関係があって、祭神が天道日女や天香語山だとすると、天道日女が子供の天香語山を覆ったときに使った衾を祀ったのが始まりかもしれない。
　ただ、平安時代中期に名神大社にまでなっていることを考えると、もっと大きな存在を祀った社だっただろうか。

＜異説＞賀志波比賣命（かしわひめのみこと）／　＜参照：日本の神々の話＞

徳島県阿南市の遠峯神社社伝では、神亀元年（724 年）、神託により、国家鎮護・延命長寿の神として賀志波比賣命を霊山・津峰山の山頂に祀ったのに始まると伝える。延喜式神名帳には「阿波国那賀郡　賀志波比売神社」と記載されている。

途中略して、阿波国の最後に「賀志波比売神社」がと記載され、讃岐国に続いている。

賀志波比売神社は、カシワヒメ神社と訓み、下総国にあったのは、阿波国から分祀されたもの。

下総国と同じ房総半島に「安房国」があるように、古代四国から黒潮に乗ってやってきて、房総半島に住みついた民族が居たことを示す。

賀志波比売神社は太陽の女神を祀るとも地元では言われているそうだが、この神社を詳しく調べた記事があったので、そこから要約を載せておきます。

志波比売神社は、「カシワヒメ」という神を祀る神社というのが正しいと考える。

賀志波比売神社の有力な氏子に柏木氏と善積氏が見える。

柏木氏は、近江国甲賀郡の神宮御厨である柏木庄を姓の発祥の地としていて、阿波の賀志波比売神社と近江の柏木氏が祀る「石部鹿塩上神社」は同一神を祀ったもの。

一方の氏子の善積氏は、近江との関係を調べると近江国造族の支族であり、近江では高嶋郡善積郷に阿志都彌神社があって、神吾田鹿葦津姫（カム・アタカアシツヒメ）を祀っている。

以上から、賀志波比売神社の有力氏子の柏木氏と善積氏は、いずれも「賀志波比売」、「神吾田鹿葦津姫」の祭祀と密接に関わっている氏族と言える。

近江国造族の故郷である出雲にそのルーツを求めると、日御崎神社と社家の小野氏であろうと考える。

出雲では太陽神を祀る神社として、出雲大社より古い歴史を持つ日御碕神社が有名で、日御崎神社の神主家は、古代から連綿と続く小野氏と分家の間野氏がある。

日御崎神社の小野氏は、近江国の滋賀郡小野に領地を持ち、分家の間野氏も小野に隣接した領地を所有していたため、地名として小野と間野が残っている。

一方日御崎神社の摂社には、近江（オオミ）の神々を祀る間野社があり、意保美（オオミ）神社（淤美豆奴神）も鎮座している。

以上から、日御崎社小野家と近江国造族は系譜上順番に繋がっていると見られることが分かる。

日御碕神社の小野氏は家紋を「柏」としている。

やはり阿波国那賀郡林郷にある賀志波比売神社は日御碕神社に由来しているのであろう。

一方、出雲には「阿陀加夜努志多伎吉比売命（アダカヤ　ヌシ　タギキヒメ）」という長い名を持つ風土記神もあって、カヤを柏の意味である栢（カヤと訓む）と解釈すれば、アダカヤとは、アタカシワ～アタカシホ　となって「吾田鹿葦津姫」の事となる。

阿陀加夜は東出雲町の地名に残っていて「出雲郷」と漢字を当てていることから要するに、吾田鹿葦とは出雲郷の事を指していることになる。

賀志波比売とは出雲の太陽神であって「阿陀加夜努志多伎吉比売命」の事であることがわかる。

更に、多伎吉とは出雲國神門郡多伎郷から来たという意味に解釈でき、多伎から拝む事ができる佐比売山の女神の事であろうと考えられる。

杵築大社上官家・富家の伝承でも、佐比売山の女神は、出雲最高の太陽の女神であると言っておられるそうだ。

ということで、下総国で出会った「カシワヒメ」は、そのルーツをたどると、阿波国、更に近江国を経て、出雲の日御碕神社に行きつき、出雲最高の太陽の女神であった。